

## 「門」読書メモ

明治43年3月から6月まで、「朝日新聞」に連載され、「三四郎」「それから」と三部作をなす作品である。

前作の「それから」は、主人公代助が友人平岡の妻三千代と恋愛するという設定であるが、自分の恋人を友人に譲るという最初の自己欺瞞が間違いの根源にあるということに気付くという内容。結婚と恋愛の対決を追求した作品である。「門」は「それから」の主題をさらに推し進めている。

主人公宗助は友人の妻御米を奪い、御米は夫に背いて宗助に走った。世間から孤立した愛の力、自然の愛に従うという個人主義的な生き方が社会の同義的な批判に耐えることができずに苦悩するという展開である。宗助は、山門に入り、老僧を訪ね、そこで十日間を不安のうちにごしたのち御米のもとに戻る。

漱石は二七年の末に鎌倉円覚寺の釈宗演に参禅している。このときの心境が宗助に託されているともいわれる。漱石の苦悩と宗助のそれとは質的に異なるとはいえ、参禅の体験を利用したものにとどめる解釈すべきであろう。

宗助と御米は、平凡に慎ましく暮らす仲の良い夫婦。

宗助の弟、小六、父の財産管理を任された叔母の佐伯家で世話になっている。

叔父の急死により小六の学資が払われなくなった。

宗助と御米は、心に暗い過去を秘めている。

父の財産管理をめぐる叔父の投機失敗、小六は宗助の家に移ることになった。

夫婦の住む借家、家主坂井、坂井の家は崖の上に見える。

ある日、家主の家に泥棒が入る。

坂井祖母の文庫が縁で坂井と宗助の関係ができる。

宗助が屏風を売った古道具やと坂井が古馴染、懇意となる。

小六、夫婦の家にやっと越す。

夫婦和合同棲に恵まれず、御米、易に見てもらおう。

外に向かって成長する余地を見出し得なっか二人は、内に向かって深く延び始めた。彼らの生活は広さを失うと同時に、深さを失った。

彼らの命は、同義上切り離すことのできない一つの有機体になった。

宗助、学生時代の友人安井、安井の妹と紹介された御米。

そして、恋に落ち、世間は容赦なく彼らに道義上の罪を負わせた。

ある晩、坂井に呼ばれ、小六の話、満州へ渡った弟が、金策に友人とくる、それが安井であると判明。

宗助、安井との遭遇を避け、禪寺の門を潜る。悟りを得れば自分の弱さを克服できると期待。

その後、坂井の弟、安井も蒙古にかえったことを知る

こうしたことを好まない夫婦に再び平和がおと連れた。

「本当にありがたいわね。ようやく事春になって」と晴れ晴れという御米に、しかし宗助は縁側で爪を切りながら「うん、しかしまたじきに冬になるよ」と答えるのだった。

## 門

明治43年（1910年）3月

役所勤めの野中宗助は、崖下の借家で妻と二人で慎ましい生活を送っている。宗介は京都の大学生時代、友人の安井と同棲していた女性（お米）を奪い、自分の妻にしたと言う過去がある。そのため宗介は大学を中退し、京都を離れることとなる。広島・福岡を経て、ようやく役所勤めの役人として東京に戻ってきた宗介であったが、家主坂井のもとに坂井の弟と連れ立って、満州へ渡っていた安井が来ると言う話を聞かされる。悩む宗介は鎌倉の山寺に赴く。高校生の弟・小六の学資問題を絡めながら、薄給な腰便官吏夫婦の日常と苦悩が描かれる。

季節は春に移った。

「門」 十四より

「略奪婚」の報いを受け、崖下の陰気な家に淋しく暮らす「門」の夫婦。「略奪婚」の経緯の肝心な部分はしかし、作中はほとんど語られない。回想ではむしろ、二人が恋愛関係に至る以前、最初の出会いのときの、何気ない会話を交わした場面だけが描かれる。「門」の前に佇む男女の、降り曲がった影が土塀に映るこの場面は極めて印象的だ。漱石の小説技術の高さが際立つ場面である。

### 今回の感想

「門」は不思議な作品である。社会から孤立し、うらぶれてひっそりと生きる一組の夫婦を描いたこの物語は、しかしどこか静かな幸福感を漂わせている。

孤立した夫婦の生活に幸福感とは奇妙な取り合わせだが、「門」をよく読めば、いかに二人が社会から孤立していても、二人がお互いに孤立しているわけではないことがわかる。

もちろん宗助と御米は無二の信頼で分け隔てなくむすびついているわけではない。お互いに秘密もある。沈黙もある。語らぬ言葉もある。けれどもしばしば漱石は記している。

「夫婦は世の中の日の目を見ないものが、寒さに耐えかねて、抱き合って暖をとるような具合に、御互同志を頼りとして暮らしていた」

「歩いている先の方には、花やかな色彩を認める事ができないものとあきらめて、ただ二人手を携えて行く気になった」

寂しい生活を二人ひっそりと、けれども確かに手を取り合って歩んでいく夫婦を描きながら、漱石は絶妙のバランスを失わない。ときにユーモアを、時に諧謔を程よく織り交ぜ、孤独の背後に絆を描き、借錢に苦しむ二人を語りながら、夫婦お互いの気遣いに触れて、大いに読者を楽しませてくれる。

多様な漱石らしさが見事に結実したという意味で、いかにも漱石らしい作品と言えるのではないだろうか。

現代は誰でも孤独を抱えて生きている時代である。

多様化という名のもとに価値観が寸断され、善悪の基準も定まらず、社会という大きな枠組みはすでに形骸化して、多くの人たちが選択の余地もなく孤立や孤独とともに生きている。

その意味では、現代人のそれぞれが宗助であり、御米であると見えてくる。

この孤独という、時代とともに存在感を増してくる重い主題を描きながら、しかし「門」には希望がある。

坂井の宅を訪ねても、禅寺の門を叩いても心の休まらない宗助の姿に、我々は絶望を感じるわけではない。ため息をつきながら御米のもとに還っていく背中を、苦笑とともに見送るだけである。

作中を満たすこの不思議な安堵感こそ、ある意味で余裕派漱石の品格と言っ  
て言えないこともないであろう。少なくともあまり切れ味の良い哲理の刃をふりかざして返り血を浴びるより、「ただ二人手を携えて」行こうという漱石の態度に、深い共感を覚えるのである。

## ストーリー

学生時代に友人安井の妻である御米を奪った野中宗助は、二人で崖下の家に隠れるように住んでいます。平穏で静かな生活だけど、いつ嵐が吹き荒れるかわからない、緊張に充ちた不安定な日常生活です。

宗助の弟小六は、父の遺産を管理していた叔父に面倒を見てもらっていました。しかし、暗い過去の影におびえた宗助は小六の学費問題で、叔父に積極的に交渉することもなく、結局小六を引き取り、三人で暮らすこととなります。

同居の気苦勞もあって、御米は寝込んでしまいます。

ある日、御米はある易者に見てもらおうのですが、易者は「あなたには子供はできません」と先行します。御米は実は三度子供を授かりながら、どの子も今く育たなかったのです。最初の子どもは五か月で流産し、二度目は月足らずの未熟児として生まれ、一週間後に死亡します。上京した最初の年に、御米は懐妊しますが、死産でした。御米は易者に「なぜでしょう」と聞き返すと、易者は「あなたは人に対してすまない事をした覚えがある。その罪がたたっているから子供は決して育たない」と言い切ったのです。

やがて、泥棒騒ぎが縁となって、宗助は崖上の大家である坂井と親しくなります。新しい年が来て、宗助は坂井の家に招かれ、話の成り行きで小六が坂井の書生として住み込むことになって、小六の前途はようやく片が付いたと一息つきます。ところが、その坂井の口から思いがけないことを聞き、宗助は愕然とします。

安井は宗助に妻を奪われた後、一人で満州にわたり、そこで満州や蒙古を渡り歩く冒険家である坂井の弟と偶然知り合ったのです。その坂井の弟が昨年暮れ、安井を伴い帰郷しているというのです。それを聞いた時、宗助は安井と同席する羽目に陥るかもしれないと、不安に駆られます。

どうすればいいのか？

そうすけは御米に打ち明けることも出来ず、救いを求めて参禅を決意します。寺で「父母未生以前本来の面目」という公安を与えられるのですが、結局、宗助は何一つ悟りを得る事ができません。そうすけは落胆して寺を去るのですが、日常に戻ってみると問題は自然と解決していました。宗助が参禅している間に安井は満州に戻ってしまい、こうして宗助の危機は回避されたのです。

「本当にありがたいわね。ようやくの事春になって」と晴れ晴れしい顔をする御米に対して、宗助は「しかしまたじき冬になるよ」と答えたのです。

#### 読書のポイント

「それから」に続いて朝日新聞に連載されたのが「門」で、「それから」のその後ともいべき作品です。主人公は野中宗助と御米の夫婦で、冒頭から平凡な日常生活の様子が淡々と描写されています。しかし、淡々とした中に、突然、恐ろしい言葉が顔を出すのが漱石文学の特徴です。

易者に占ってもらった場面で、易者は御米に対して、

「あなたには子供はできません」と宣告します、御米は「何故でしょう」と聞き返す。易者は、すぐに「あなたは人に対してすまない事を下覚えがある。その罪がたたっているから、子供は決して育たない」と言い切った。御米はこの

一言に心臓を射抜かれる思いがあった。

そして、「宗助と御米の一生を暗く彩った関係は、二人の影を薄くして、幽霊のような思いを何処かに抱かしめた。彼らは自己の心ある部分に、人に見えない結核性の恐ろしいものが潜んでいるのを、仄かに自覚しながら、わざと知らぬ顔にお互いと向き合って年を過ごした」

二人は世間から隠れるようにして、ひっそりと暮らしているのですが、その一見平穏な日々には「結核性の恐ろしいもの」が潜んでいて、いつそれが顔を出して、二人の生活を無茶苦茶にするかわかりません。

何故なら、二人は過去に大きな罪を犯していました。御米は三度子供が出来ましたが、最初の子どもは五カ月で流産し、二番目は月足らずの未熟児で、伊週間後に死にました。サンド目は死産でした。それも自分が犯した罪の所為だと怯えます。そんな御米にとって「あなたは人に対してすまない事をした覚えがある。その罪が祟っているから、子供は決して育たない」といった易者の言葉は心臓を射抜かれるほど恐ろしかったのです。

彼らは、人並み以上に慎ましい月日をかかわらずに今日から明日へと繋いでいきながら、常にそこに気が付かずに顔を見合わせているようなものの、時々自分たちの睦まじい心を、自分で確かめることがあった。その場合には必ず今まで無妻軸過ごした長の歳月を遡って、自分たちがいかな犠牲を払って、結婚をあえてしたかという当時を思い出さないわけにはいかなかった。彼らは自然が彼らの前にもたらした恐るべき福州の下に戦きながら跪いた。同時にこの復讐を受けるために得たお互いの幸福に対して、愛の神に一弁の香を焚くことを忘れなかった。彼らは鞭うたれつつ死に赴くものであった。ただその鞭の先に、すべてを癒す甘い蜜の着ていることを覚ったのである。

この短い文章の中に二人の人生が凝縮されています。そして、「罪と罰」という深い主題が隠されているのです。

宗助は大学時代の友人であった安井の妻の御米を奪って逃げたのです。そういった意味では、「門」はまさに「それから」のその後といえる主題を持っています。

「自分たちがいかな犠牲を払って、結婚をあえてしたか」とあり、そのために「彼らは自然が彼らの前にもたらした恐るべき福州の下に戦きながら跪いた」のです。

この罪という主題は、作品の底流に流れ、主人公たちを徐々に追い詰めていきます。

事は冬の下から春が頭を擡げる自分に始まって、散りつくした桜の花が若草に色をかえる頃に終わった。すべてが生死の戦いであった。青田家をあぶって油を絞るほどの苦しみであった。

短い文章だが、二人の人生に何が起きたかを象徴的に表現しています。まさにそれは、「生死の戦い」だったのです。そして「青田家をあぶって油を絞るほどの苦しみ」でした。

漱石の鋭い目は二人の人生を俯瞰します。まさに天の眼をもって、一つ一つの出来事に的確な言葉を与えていきます。この描写力の一つをとっても、漱石はすごい、です。

周囲の人たちからは二人は「不合理な男女として、不思議に映った」のです。二人からしても「そこに言い訳が何もなかった」のです。

こうした描写は「愛」というものの本質をついているように思えます。なぜ、友人の妻を愛してしまったのか、なぜ、華族や友人、社会のすべてを敵に回してまで奪わねばならなかったのか、二人はいくら問い詰められても答えることはできません。しかし、それは二人にとって「生死の戦い」だったのです。まさに理屈では説明できないものこそ「愛」ではないでしょうか。

そして気が付くと、二人はあらゆるものから捨てられていたのです。

宗助は崖上の大家である坂井と次第に親しくなるのですが、ある時、その坂井から思いがけないことを聞いて、愕然とします。

安井は宗助に妻を奪われた後、一人、満州にわたっていきます。坂井の弟も満州、蒙古を渡り歩く冒険家で、偶然安井と知り合い、昨年暮れ、すでに安井を伴い帰郷していると言います。

宗助は安井と同席する羽目に陥るかもしれないと、それを聞いた時に胸中に恐ろしい不安が沸き起こってくるのです。

宗助は平穏な生活がひよんなことから突然崩れ去ることに怯えていたのですが、このことを御米に打ち明けることが出来ませんでした。現実を動かすことが出来ない以上、それを受け止める自分の心を作るしかありません、そこでそうすけは参禅を決意します。

ところが、理性的である宗助にはどうしても宗教の門に入ることが出来ません。

かといって、宗教に救いを求めてきたのですから、その門から立ち去ることも出来ないのです。

「要するに、彼は門の下に立ち竦んで、日の暮れるのを待つべき不幸な人であった」

ここに作者漱石の苦悩が投影されているような気がします。徹底的に理性的な漱石は「信じる者は救われる」といったように、何も考えずに振興の道に入ることは到底できないのです。しかし、漱石が抱えた苦悩は宗教以外に救う道がないことを知っていたのでしょう。「門」の世界はそれほどに救いようのない苦悩を描いているのです。